

記念品はステンレススプーン一本、カレー用より少し大きめ。仲間の職人に作ってもらったもので立派なもの。大切に保管し時々眺めてはあの頃の食事を思い出している。

帰国の皆さん、特に全抑協の全国の皆さんのますますの健康と幸せを祈っております。

〔編 注〕

加藤源四郎氏の手記は、第一巻にも掲載されております。

私の人生体験記

旧満州―シベリア―那須町

栃木県 佐藤 繁

まえがき

終戦後五十数年が過ぎ私達も年をとり、戦争経験者も少なくなり、当時の苦しい時代も忘れられがちの今

日この頃である。昭和二十年八月、我々が終戦と同時にロシア国の捕虜となり強制労働を強いられ、同胞が大勢異国の地に眠っている。私は運よく母国日本に帰る事ができ、七十四歳の老人となり、孫に囲まれ健康に恵まれた体で病気もせず毎日を幸せに暮らしている。また、平成四年、シベリア慰霊訪問団に参加、平成十一年、中国（旧満州）の慰霊訪問団にも参加し墓参を済ませ、人生に区切りのついた思いがいたします。このたび私の人生の苦勞と思い出を後世に伝えたく筆をとりました。

私の体験記

昭和十五（一九四〇）年三月、希望に胸をはずませ大陸の地満州に開拓者として、父五十一歳、母四十五歳、私は十五歳、姉二人、妹一人、弟一人の七人家族で大規模農業を夢みて渡満しました（出生地、山形県西置賜郡鮎貝村の分村計画にて渡満、北満の地に第八次太平山開拓団に本隊として入植する）。

三月の満州は寒さも厳しく日本では想像を絶する寒

さでした。当時日本は軍国主義で中国との戦争の真ただ中でした。私も尋常高等小学校を卒業して、いたので学校に行き軍事教練の明け暮れの日々でした。また、四月下旬となると軍事教練と農作業との繰り返しました。四月頃姉一人が結婚、五月上旬頃団本部より耕地の分配があり我が家も忙しくなり、父と姉の三人で畑の種子まき、牛馬の手入れ等忙しい毎日でした。当時、ラジオ、新聞もなく戦況を知る由もなく、毎日を農作業で過ごしておりました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発となり、当時開拓地にはこれといった情報源もなく、当時の戦況はまったく知るすべもなく農作業と軍事教練の毎日でした。作物は大豆、小豆、トウモロコシ等でした。やがて水田も出来て大規模農業を目指し一生懸命に働いた。二人目の姉も昭和十九年二月頃結婚し、戦況も厳しくなり、隣近所の男には続々と召集令状が来て家族と別れ戦争にと駆り出されて行きました。その頃になると私達も満州の気候にも慣れ、仕事も順調で、収入も安定し、大規模農業も夢ではないと思うように

なりました。

私も昭和二十年二月中旬ごろ十九歳で徴兵検査となり、甲種合格となり、野砲兵として四月上旬ごろ召集令状が来て入営することになったのです。そのころは開拓団の男達も三分の一は兵隊として入営していたと記憶しています。「入営地 満州牡丹江 興隆地区六九〇部隊 滝波耕助少将野砲隊」に入隊しました。戦火も厳しくなり、毎日六頭引きの大砲を引き、演習と、爆薬を持って戦車に飛び込む練習の繰り返しました。初年兵は演習から帰ると掃除、洗たく、食事当番、銃の手入れ等寸暇もなく働き、失敗や落ち度でもあれば班の古年兵が初年兵全員集合と声がかかり、自分分は手が痛いのでスリッパを両手に持ち往復ビンタの体罰でした。体罰を受けた後ははおが腫れあがり食事も出来ない事が多い毎日でした（私の班は初年兵四人でした）。食事は芋めしと昆布の味噌汁でした。噂では馬部隊は馬の餌代で兵隊の食事が悪いとの事でした。六月中旬頃第一期検閲となり二等兵から一等兵となりました。そのころ初年兵として入隊して来たのは

韓国人が多かったと記憶しています。

忘れもしない昭和二十年八月十二日午後三時ごろサイレンが鳴り、私と戦友の二人で馬屋で馬の手入れをしていた時でした。何事かと外に出てみると、空に数十機の飛行機が爆音も激しく飛んで来て、部隊の上空でばらばらと爆弾を投下してきたのです。我が部隊は牡丹江と牡丹江の対岸に位置している部隊でしたので、部隊の上空で投下した爆弾は対岸の牡丹江の変電所に落下、牡丹江街と辺り一面は見る見る火の海と化してしまつた。部隊長の命令で、五時までに営門に戦いの準備をして集合するようにとの連絡があり、急ぎ馬に装具を着け大砲と弾薬車を引き営門に集合すると、前の部隊は山砲隊だったが、ほとんどの兵隊は沖繩に移動し、新編成の部隊は野砲隊であり、当時、部隊には山砲の弾薬だけで野砲の弾薬はなく、弾薬車には靴下に米を入れたのがあるだけでした。営門前で部隊長より、ロシア軍が日本軍に宣戦布告をしたので、我々は第五軍の赤鹿連隊下にあるので鏡泊湖の陣地に移動する、皆心して頑張るようにと訓示がありました。

た。八月の満州は雨季で、その年は特に雨が多く雨がっぱを着て馬に乗っての逃避行となり、暑さのため雨がっぱの下は汗でびしょり、それは大変な移動行軍でした。空にはいつも飛行機が飛び、遠くでは大砲や爆弾等の音が聞こえ、戦争の激しさを知らされた。昼は現住民の空き家で休み夕方より夜の行軍となりました。途中開拓者の避難民（男はいなく女と子供）だけでした。また、幹部候補生の部隊とすれ違い、お互いに頑張ろうと声を掛け合い励まし通り過ぎたことを思い出します。

三日目の夕方ごろだと記憶している。飛行場のある東京城の部落に着くと、広場に避難者が何千人と集まっており、また、移動する兵隊と共に火を炊き夕食の準備でした。我が部隊は陣地に向かって進軍あるのみでした。部落を通り抜けるのに、雨のためぬかる路を大砲を引き一睡もせず部落を通り抜けた時は朝になっていました。行軍中、食料を燃やし鉄道や橋を破壊する日本軍が所々に見られた。先輩に聞くとロシア軍の侵入を防ぐためとのことでした。五日ほど過ぎた

ころ、鏡泊湖のほとりの朝鮮人部落の空き家で休み、次の日、船に大砲を積み込み、馬に乗り陣地に行くことになったのです。このころになると、上空にはあれほど飛びかっていた飛行機の姿がまったくなく、どうしたのか不思議に思っていたやさき、八月十七日午後六時ごろようやく陣地に着く。

一息入れる間もなく先発隊の先輩から戦争は終わり日本軍は負けたのだと聞き、我々はただ安然となり声も出なく放心状態で立ち尽くしたままでした。時が過ぎ我に返った時、本部より命令があり、今年は現地にて越冬するとの連絡があり、休む間もなく冬の寒さに備え伐採炭焼の準備で毎日忙しく働いた。暇をみて同胞と二人で湖のほとりに行つて見ると湖の周りには避難民でいっぱいでした。また、道路はロシア軍の兵隊と戦車が意気揚々とかつ歩し、異様な雰囲気は今でも脳裏から離れません。あの時ほど日本の敗戦をまざまざと見せつけられ、今後の日本国はどうなるのか、ただ安然とし戸惑いを感じた事はありませんでした。

何日か過ぎ去り、記憶は定かではありませんが、九

月中旬頃だったと思います、ロシア側より武装解除の命があり、我が部隊全員陣地を後にして山を下りることになった。将校は軍刀、拳銃を捨て、兵隊は短剣、銃を捨て山積みになるのを見て皆涙を流し残念と泣いたことが思い出される。部隊全員が終わったのが昼頃だと記憶しています。その場より一千人単位での牡丹江に向かっての徒步行軍となり、朝暗いうちに起こされ午後三時頃野宿となる繰り返しの毎日でした。前記で述べたように雨の多い年でしたので、雨の中の野宿は筆舌に言い表すことが出来ないと思います。行軍中休憩になるとロシア軍の兵隊が物色し略奪があり、時計、万年筆、バンド等手当たり次第奪っていった。話に聞くと、ロシア軍の将校からロシア兵に略奪をしないようにと指令があるとのことでした。伝令で将校に訴えると将校が馬で飛んで来て、拳銃を空に向け撃ちロシア兵を脅し略奪を制してくれました。牡丹江の旧歩兵部隊の四一四宿舍に着いたのは陣地を出発してから七日ほどしてからと記憶しています。

その後、ロシア軍の監視の下、毎日貨車の改造（二

段のベッド）であり、我々日本兵をウラジオストックより日本国に帰るのに使用するための作業であるところシア兵の言うことを真にうけ、遠い日本に思いをはせ、つらい作業も頑張っておりました。作業のない時は兵舎を壊し薪にし飯盒で御飯を炊き、同胞といつ日本に帰ることが出来るのか、話をしながら日本の国のことを思い涙したものです。

そうこうしているうち十月となり北満の朝晩も寒くなり、日本に帰るのがいつなのか、この地に越冬するのかと心細くなってきたものでした。

十月中旬ごろ、朝早く「ヤポンスキーダモイ」とロシア兵に突然起こされ、支度もそこそこ車中の人となり、我々が改造した貨車により一千人単位での移動である。同胞は皆いよいよ日本に帰れるものと思ひ顔も明るく笑い声も聞こえる程でした。昼ごろ貨車がゆっくりと動きだす気持ちは日本に帰った気分でした。一夜明けると、もうウラジオストックが近いはずだと皆が口々に話し始めました。そのとき仲間の一人が磁石を持っていて、貨車が北に向かっていると言うではあ

りませんか。先程まで明るく話していた仲間はみな全身の力が抜けて行くのがわかりました。日本に帰れるどころか捕虜としてシベリアの地に行くのだということでした。だれもがシベリアの地理もわからず、どこを汽車が走っているのか見当もつかない有様で、皆不安を隠せませんでした。所々で汽車に給水しながらゆっくりと走り続けました。給水のため汽車が止まると、現地人の子供達がパンやタバコ等売り集まり、言葉もわからなくただ騒々しいと思いました。十日ほどして目的地である（シベリアの地）タイシエツト街より北に三十五キロメートル地点の収容所（ネヴェルスカヤ）に到着したのは昭和二十年十月三十日の朝の事と記憶しております（土地の名前は平成四年慰霊訪問団に参加してわかったのである）。寒い朝で雪が五十センチメートル程ありました。収容所に入る指令がなかなか出なく、いたずらに時間が過ぎて行きました。その間、方々より、営門で所持品の検査があり米、時計、万年筆等没収されるとのうわさが立ち、みんな時計、万年筆等は現地人とパンやバター、食糧

品と交換し腹一杯食べた思い出があります。

やっと夕方になり入所の指令が出て、五人横列で並び検査を受け、テントのベッドに落ちついたのは夜の八時過ぎだったと思います。この収容所には先発隊二大隊二千人が収容されているとの事、私達と共に三千人の収容人員となった。

作業はバーム鉄道の建設とのことで、シベリア鉄道のタイシエット駅よりブラーツク街までの四百三十キロメートルの長さの工事とのことでした。道のない山また山を切り開き鉄道敷設の工事でした。当時は木材の伐採作業が主でした。入所当時は朝と昼は粥の食事ではパンとスープでした。十日もしますとノルマ制になり、規定の作業の一〇〇パーセントは夜のパンは三百五十グラム、七〇パーセントは二百五十グラム、五〇パーセントは二百グラムと差がつき、朝と昼は粥の食事でした。

冬のシベリアは、朝は十時頃お日様が出て夕方は三時三十分となると暗くなり始まり、作業は思うようにはいかどらず、寒さと空腹、そのうえ日没が早いのでい

つも作業は七〇パーセントでした。パンが二百五十グラムではいつもひもじく、全身に力がなく作業場まで歩くのが精いっぱい仕事も出来ず、早く日本に帰りたいと仲間と話をしながら涙を流したものでした。寒いのでたき火をし私達が話をしていると監視兵が空に向けて銃（マンドリン）を撃ち我々を脅し仕事を強制したものです。

記憶は定かではありませんが、昭和二十一年の二月中旬頃だったと思います、私が朝起きるとめまいがして熱もありました。すると班長が仕事を休み医務室で診察を受けるようにと言われ、九時頃医務室に診察に行き診断を受けた結果発疹チフスと診断され、熱も四十度もありましたのですぐ入室するようとのことでした。二日間も眠ったままでした。軍医さんに起こされ、すぐ病院に入院とのこと、大急ぎでテントに行き少しばかりの荷物を持ち医務室に帰ると仲間が二人待っていました。二人も入院することでした。夕方暗くなつてからロシア兵が来て、ネヴェルスカヤ駅まで一緒に歩きました。何キロ歩いたか覚えていませ

んが、駅からすぐ貨車に乗り、熱のためかすぐ眠り、何キロメートル走ったのかロシア兵より貨車から降りるようにと指示があり、貨車から降りると車が待っていた。車に乗りしばらく走ると病院に着いた。私はテントの病室に案内されました。いつしか二人の仲間はいなくなっていました。名前も聞かなかった。テントの中は暖かく大勢の仲間が六十人いるとのことでした。

二段ベッド上の空いている所にすぐ横になる。隣の仲間が、ここは昨日仲間が死んで空いた所だと言うではありませんか。でも気にする余裕もないほど体は衰弱しており、横になるとすぐ眠ってしまいました。隣の仲間には食事だと起こされる。時計もなく時間が分からないので仲間に聞くと九時ごろだとの事。外はまだ暗かった。食事はパンとミルク入りの粥でした。十時ごろ女医さんが診察に来て私も女医さんの診察をうける。通訳に何か言っているが言葉が分からないので自分の病気がどうなのか分からない。通訳の人が、もうよいから寝ているようにとのこと。薬もなく寝台に横

になる。とても不安な気持ちである。健康になった仲間が一生懸命ドラム缶の暖炉に薪を燃やし暖をとってくれました。食事は一日二食である。毎日、食事と女医さんの診察の同じことの繰り返しである。ベッドに横になり眠れなく思いつくのは日本のこと、また家族のこと、早く日本に帰り家族に会いたい。また腹いっぱい白い御飯を食べたいと思ひ涙が止まりませんでした。また、毎日のように仲間が死んでゆく姿を目の当たりにし、日本の国を二度と見ることもなく、また妻や子供にも会えず異国の土となってしまふなんて無念だろう、私も日本には帰る事はできないのか、異国の土となるのかと思えば思うほど心細くなり涙が止まりませんでした。私は運がよく一週間ほどですっかり体も良くなり、女医さんにもう大丈夫と診断されました。考えてみると子供のとき父の仕事を手伝い体を鍛えたからだと思い、よかった、日本に帰れると嬉しくなり喜んだ事を思い出す。

元気になった私は、女医さんより、君は大西君と二人でテントの六十人の病人の世話をするようにと言わ

れ、日本人の作業員が運んでくる薪を切りストーブ二台に燃し、病人に暖をとらせ、また食事等の世話をする毎日でした。私も日に日に健康を取り戻していきました。そんな中、毎日のように病人が一人二人と亡くなつていくのでした。本当に残念でかわいそうでした。

そんな日が続き、外も暖かくなり草木も青々と夏を迎え、そして秋が来た。今年も異国の地で冬を越すのか、将来に何の希望もなくただ黙々と日を過ごすのみでした。九月中旬頃だったと記憶しています。女医さんより、君は健康になつたので病室の当番でなく食堂に行き作業員の食事を作る仕事をするようにと云ってくれましたので、食堂で働くことになつたのです。何の出来事もなく日が過ぎ去り、寒い冬も過ぎ春がやってきた。

昭和二十二年五月頃より共産主義の教育が厳しくなり、また、体の弱い人がヤボンスキーダモイと日本に帰つたうわさが流れるようになってきた。その頃より、収容所の人数も少なくなり、食堂の仕事もなく、

私は将校の当番に行くようにとの命を受け、将校当番をするようになった。当時、将校は五人で、三人交替で作業に行き、二人は遊んでいました。何の変化もなく日々が過ぎ去り昭和二十三年三月頃、将校は全員将校だけの収容所に行くことになり当番兵は無用となり、ロシアの将校より二十人の班長としてバーム鉄道の橋工事をするようにとの命を受け、作業をするようになったのです。毎日の作業は順調で、ノルマの一二〇パーセントの成績で、その頃より少しずつ給料も貰えるようになり、タバコやパン等自分で買うことも出来るようになり、皆も健康を取り戻し元気に仕事も出来るようになりました。また、日本人の楽団の慰問団も来て我々を楽しませてくれた。収容所も何度と変わりに奥に奥にと進み、ブラーック街に近い三百五十キロメートル地点と記憶しています。その頃よりヤボンスキーダモイとなり日本兵の帰国が始まり、収容所の兵隊も徐々に少なくなっていました。私も早く日本に帰りたいと気が気でない日が過ぎて行つた。十月頃より今度は測量の仕事もするようになり、ロシア人の将

校二人と日本人の仲間二人と五人で毎日測量の作業をするようになりました。時々ロシア人の将校が自宅に連れて行きパンと牛乳を食べさせてくれました。とても嬉しかったです。

また零下四十度の寒い冬がやってきました。今年も異国で越冬か、心細くなり、二千人いた収容所が五百人程度となってしまうこともあり、ますます心細くなってきました。

昭和二十四年の春がやってきました。シベリアに来て三年半、今年こそは日本に帰る事が出来るだろうと思いい事に頑張っておりました。また何回目かの夏を迎え、七月上旬の頃だと記憶しています。測量のロシア人将校より「サトウ ヤボン ダモイ」と聞かされ飛び上がり、ロシア人に抱きつき嬉しく涙が止まりませんでした。これで私もいよいよ日本に帰れると思うと思いい出されるのは父母兄弟の安否でした。どうしただろうか、無事日本に帰る事が出来たのだろうか。終戦当時の満州を思いい出し不安でいっぱいである。とにかく日本に帰り父母に兄弟親戚の皆さんに会いたい、そ

れから今後についての事を考えることに腹をきめる。四年間極寒の地シベリアでよく頑張ったものだと思いいながら感心しました。一千人単位で貨車に乗り、荷物らしき物もなく、バイカル湖よさようならと心に聞かせ、気持ちには日本へと気がはやる。汽車はゆっくりと東に向かい走り出す。ウラジオストクに向かい進んでいる。いよいよ日本に帰る事が出来る、皆明るく笑い声も聞こえる。一週間程でナホトカ港に着きました。船がまだ来ていないとの事で道路工事の作業をする事になりました。仕事は楽で、半分休みのような仕事で、七月二十八日頃だと記憶しています。船が来て、いよいよ乗船だ。日本の土を踏む事が出来る時が来たのだと心が弾む。一千人の仲間と共に船に乗り込む（前に述べたように当時は共產主義の赤旗を教育されておいて、皆多少共產主義者が多かった）。班長会議の結果、日本の土を踏むまでは静かに上陸をしようと話し合いをした。船の中は何事もなかった皆さんの話し声や笑い声だけでした。皆は、日本国はどうなっているのか、帰ったら仕事があるのか、何をしようか、

家族や子供の話で皆複雑な気持ちのようでした。

二三日ほどで舞鶴港に着きました。先に着いた船が二そう、赤旗の歌を歌い頑張っていました。私達は静かに上陸しようと話し合い、先に上陸するようにとのこととなりました。上陸後一人一人DDTを体じゅうに振り掛けられ、風呂に入り、小遣い千円をいただき、四年ぶりに御飯と味噌汁、お新香で夕食でした。

あの時の美味さは今でも忘れません。やっと日本に帰って来たのだと実感した。舞鶴港には各県の連絡所があり、引揚者の名簿もあり、早速山形県の名簿をめぐった。分かる人は二三人で、父母の名前はなかった。どうしたのか、満州で亡くなったのか、知る由もない係の人に聞いても分からない（父母は九州の博多港に上陸したと後日知りました）。忘れもしない八月一日、北陸線を夜行列車で新潟の坂町駅に向かう汽車の中で仲間と会う。米沢市に帰るとのこと（梅津君）でした。

坂町駅に降り立つと婦人会の皆さんが、長い間ご苦勞様でしたと何度も頭を下げられて、真っ白なおにぎ

りを食べて下さいと勧めてくれました。嬉しくて涙が止まりませんでした。その時のおにぎりの味は今でも思い出すと心が暖かくなるようです。米坂線で山形方面に行くので三十分ほど汽車を待ち、汽車が来ましたので皆さんと別れを惜しみ車中の人となりました。仲間が一人、隣部落の二歳年上の樋口君と二人でした。

今泉駅に着くと駅には鮎貝村より民生課の女の係の方が迎えに来ていました。長井線に乗換えのため一時間ほど駅前の旅館で休むとの事でした。夜行列車のため眠く、横になりぐっすり眠った。汽車が来ますと女の方に起こされ、起きてみると土屋村長がおり、ご苦勞様でした。君の両親と兄弟が無事帰って来て叔父さんの世話で頑張っていると教えてくれました。また、父は栃木県的那須の地に開拓者として入植し私の将来のために農地を確保し頑張っているとの事でしたので、ひとまず安心し、早く両親に会いたいと思いました。

長井線の汽車に乗り、生まれ故郷が近づき、ようやく鮎貝駅に着く。十年前意気揚々と大規模農業を夢見て皆さんに送られ満州に渡り、今は引揚者、なんと敗

戦国の者のみじめさをまざまざと見せつけられた気持ちでした。駅前に婦人会や同級生また民生課の皆さんに大勢出迎えていただき、先輩の樋口君に、お出迎えありがとうございます、留守中は皆さんに大変お世話になりました、とお礼の挨拶をしていただき、皆さんより長い間ご苦労様でしたと頭を下げられ、父母のお世話になっていいる部落へと急ぐ事にしました。途中従兄弟と会い、よく無事でシベリアより帰ったと声をかけられ、嬉しく抱き合い涙が止まりませんでした。一キロほどで従兄弟の家なので一緒に行き一休みをし昔話や終戦後の話が尽きず、二時間ほど休み母と兄弟のいる四キロメートルほど行った叔父さんの住む部落に行く事にしました。

従兄弟の若夫婦に送られ道を急ぐ。夕方ようやく我が家に着く。八月二日の事と記憶している。母はよく元気で帰ってきてくれたと喜んでくれた。また、妹弟も会えてよかったと喜んでくれた。父は三日に栃木県より来るとの事でした。夕食は胃が弱っているからと粥を作ってくれた。本当においしかった。夜行で来た

ので眠く、食事を済ませすぐ床につく。朝早く起こされ、従兄弟が来て、私の父母がお世話になった部落の皆さんにお礼に行くようにとの事、支度もそこそこ出かける。二時頃家に帰ると父が来ていた。丈夫そうな父を見ると安心した。終戦当時は大分苦労したとの事でした。なんとか命からがら家族が助け合い引き揚げてきたという。父と今後について色々話し合いをした。父は、栃木県的那須町に開拓者として入植し国より土地を四町歩いただいてあるので那須に行き農業で生活をしようと張り切っていました。その時、父は五十八歳でした。満州で苦労してこれからという時の終戦で、また一からの出直しである。泣き言を言ってもどうしようもないと観念する。お盆の月なので親戚の墓参りを兼ねてお世話になったお礼に行く事にしました。

お盆も終わり私も丈夫で帰って来たので、今後の生活も考え那須に早く行き生活設計を建てようと八月二十一日、夜行列車で那須高原の開拓地に来た（現在の住所である）。昭和二十四年頃は機械等もまったくな

く何事も手作業であり、立ち木を切り唐くわで開墾し、夜遅くまで働き馬鈴薯や小麦、大豆等を作り生活をしました。二年ほどしてから陸稲も作り、親子家族も全員揃いどうにか生活も出来るようになり、二十八年、私も結婚しました。その頃より水田もでき酪農にと経営も安定してきました。私は子供にも恵まれ父母も健康で妹と弟も就職し、何事もなく何年か過ぎ去り、兄弟も結婚し父母も高齢となり、酪農も設備投資が多くなり友達の勧めで水道設備工事に転職をし、今は父母も亡くなり長女に養子を迎え、設備業も養子に譲り従業員もおり忙しい毎日を過ごしているこの頃です。私も子供と孫達に囲まれ五十年前の苦労も忘れがちである。

しかし、私も七十五歳となりました。常日頃より脳裏にいつもあった、シベリアで亡くなった同胞と終戦時満州で亡くなった姉や姪と甥の墓参をと考えていたやさき、平成四年七月、全国抑留者協会のシベリア慰霊訪問団に参加し、平成十一年七月、中国慰霊訪問団にも参加し同胞の墓参も済ませ気持ちの整理もできま

した。いまは国内、国外と観光旅行の日々を過ごしている今日この頃であります。今後はボランティア活動に専念し、社会の皆さんの一助になればと思い、残りの少ない人生を有意義に過ごしたいとお願いいたします。

抑 留 者

栃木県 青 木 久

一、出生から入隊

① 出生から卒業後の生活状況

父辰三が皇宮警備官であったので、東京都荒川区町屋で大正十三（一九二四）年二月一日生まれ、その後、父が栃木県警察官に転職で、昭和二（一九二七）年、宇都宮市大寛町に移転。更に同四年、塩谷郡北高根沢村に移転。

五年四月、隣接、熱田（にいた）村、文挾尋常小学校に入学。小学校五年生の時、母イチの実家の那